

かずさの博物誌

ヤマガラ

～暖かみのある、
里山の小鳥～

文・写真／成田篤彦

2015.6.20

今年の一月下旬、「ツツビー、ツツビー」とヤマガラが近所の林でのんびりとさえずっていた。少し、鼻にかかる、穏やかな鳴き声だ。

「珍しい」と思った。

ヤマガラは林から一本だけ突き出た、コナラの枯れ枝の先に止まっていた。青空を見上げて、さえずっては、ロウのように艶のある虫こぶをついばんでいた。

ヤマガラは普段、林内の暗い枝先を素早く飛び回るので、撮るのが難しいが、この時は何回もシャッターが切れた。

この林で冬の間は盛んに鳴き声を聞いたが、田の耕作が始まる頃になると姿を消してしまった。

さて、ヤマガラを詠んだ次の句がある。

ヤマガラの高音に成るも分れかな

去来

この句のように、ここでは春の繁殖期が近づき、高音でさえずり

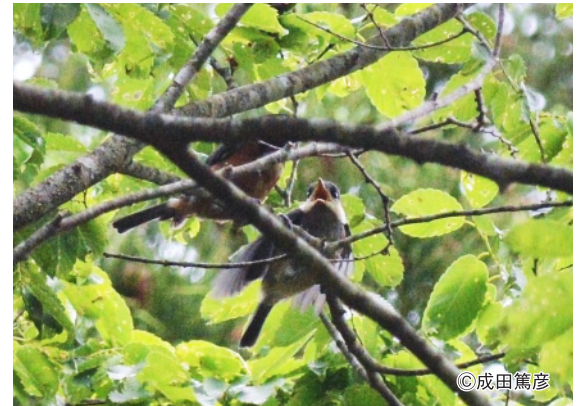
©成田篤彦



▶ さえずるヤマガラ＝二〇一五年一月二十日
木更津市

◀ えさをねだるヤマガラのヒナ
二〇一四年五月二十二日

木更津市



©成田篤彦

始めると子育てのため、えさが豊富な林に移動するのだろうか？

俳人はいつもながら自然をよく観察していると感じる。

ところで、ヤマガラにはこんな句もある。

山雀^{ヤマガラ}の輪抜けしながら渡りけり

一茶

ヤマガラはいろいろな芸をするので有名な小鳥で、見世物としては江戸時代が最も盛んであったという。

筆者も昭和二十年代末に東北のお祭り^{マツリ}で、ヤマガラのおみくじ引きの芸を見たことがある。

ヤマガラ使いが鳥かごの入り口を開くと、竹ひごで作った参道を飛び跳ねて渡り、小さな神社に行く。ひもを引いて鈴を鳴らし、扉をくちば

©成田篤彦



▶ えさをくわえるヤマガラ＝二〇一一年五月四日
袖ヶ浦市



©成田篤彦

▶ 水浴びをするヤマガラ＝2014年10月2日 袖ヶ浦市

して弾いて開け、おみくじをくわえて戻ってくる。そして、封を切りヤマガラ使いに渡す。ヤマガラ使いはエゴマの種を一つ、ご褒美に与える。複雑で見事な芸である。

ヤマガラは大きな木の実を足指で押さえて割って食べるなどの習性がある。それらを上手に生かして調教するそうだが、並大抵の努力ではできないという。

ヤマガラはシジュウカラの仲間だが、腹や胸が赤茶色で、里山の暖かみを感じる、小鳥だ。

房総半島の南部に多く、最近、少し増えているように思える。

暗い林で素早く活動するので、なかなか気付かないかもしれないが、鳴き声に注意していればきっと皆さんも出会えると思う。

memo

ヤマガラ

スズメ目 シジュウカラ科

全長約十四センチ。日本、朝鮮半島、台湾だけに分布。

主に、常緑広葉樹に棲む。県内では房総南部に多いが、近年、北総でも観察例が増えている。主に、カなどの幼虫を食べるが、エゴの実やドングリも食べる。年間を通してつがい^{ツガイ}で生活する。巢は木の洞やキツツキの古巣にコケ等を敷いて作る。産卵は三〜六月。昭和前半までは縁日などでこの小鳥の芸がみられたが、現在は見られない。